

令和元年5月10日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02505

研究課題名(和文) 多言語空間ボスニアの言語状況の解明

研究課題名(英文) Study on Language Situations of Bosnia as a Multilingual Space

研究代表者

三谷 恵子(Keiko, Mitani)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：10229726

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの言語状況を、これと隣接するクロアチア、セルビア、モンテネグロのそれとあわせて共時的、また通時的に多角的に研究した。

ボスニアでは1995年以後国土がボスニア連邦とスルブスカ共和国に分断されたが、その状況は人口の住み分けを進め、住民の言語規範意識にもこの状況が反映されていることがわかった。

またボスニアを含む南スラヴ地域の中世文献の研究から、オスマン支配下にあったボスニアでも中世から近代に至るまで主に修道院などで南スラヴの文献文化が継承されていたことが明らかになった。この地域の文献は中世スラヴにおける言語変化と言語文化のあり方を知る上で重要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、ボスニアとその近隣地域の言語状況を事例として、国境の形成と民族分離的政策が言語意識にも反映し、本来は同じ言語だったものが、異なる規範意識や言語イデオロギーのもと、別々の言語と意識されるようになることを、明らかにした。

またボスニアにおいては、中世から近代に至るまで、キリスト教文献が作られ、独自の言語文化が形成されていたことを実証的に検証した。この地域で作られた文献は、南スラヴ言語史また言語文化史を研究する上で貴重な資料を提供するものである。

研究成果の概要(英文)：This research project examined various dimensions of contemporary and historical language situations in Bosnia and Hercegovina as well as in the neighboring regions.

The research uncovered the following findings. The territorial division of Bosnia, after the 1995 Dayton Agreement, into the Federation of Bosnia and Hercegovina and the Republika Srpska has had a strong effect on people's sense of belonging to a particular language community. The different language names of Croatian, Bosnian and Serbian have also had a strong hold on people's perception of their language norms.

As for the historical dimensions, the research affirmed that throughout the medieval times, including the period of the Ottoman regime, Slavonic writings were copied and preserved in both Catholic and Orthodox monasteries. These manuscripts are valuable for the historical study of Slavonic languages and the study on literary culture of the South Slavic regions.

研究分野：スラヴ語学

キーワード：ボスニア ボシニャク人 クロアチア セルビア モンテネグロ 中世南スラヴ圏

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ボスニア・ヘルツェゴヴィナは、隣接するセルビア、クロアチア、モンテネグロと言語的連続体にある。19世紀後半からユーゴスラヴィア時代を通してこれらの地域は、セルビア・クロアチア語という同じ標準語の使用圏内にあり、言語文化を共有してきた。歴史的には、東西キリスト教会の文化に加え、15世紀以後はオスマン＝イスラーム文化も受容し、異なる宗教的価値観が共存する地域であった。しかし20世紀終わりに起きたユーゴ戦争は多くの損失と混乱を生み、1995年のボスニア戦争終結後、ボスニアはボシニャク人ならびにクロアチア系住民を主体とするボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦と、セルビア系住民を主体とするスルプスカ共和国(以下「共和国」)に分割された。これにより、ボスニアを構成する主要三民族の分断が強まり、言語においても、もとは同じ一つの標準語であったものが、セルビア語、クロアチア語、ボスニア語という名称で区別されるようになった。この状況が生じた1990年代から2010年代初頭までの20年余りの期間には、ボスニアをテーマとした著書や研究論文が多く現れたが、ほとんどは、ユーゴ崩壊と内戦前後の政治状況、旧ユーゴ地域全体のナショナリズムなどに焦点をあてたもので、この地域ならびにこれと連続する地域の言語文化を掘り下げて研究するものはあまりなかった。そこで、紛争終結から20年を経たボスニアならびに隣接地域において、言語と民族的帰属の関係、新たに名称を与えられた標準語の実態、人々の標準語に対する意識、言語と言語以外の文化との関係性がいかなるものであるか、また歴史的言語圏としてのこの地域の価値はどういったものか、といった問題を多角的に研究する必要があった。

2. 研究の目的

本研究は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける言語状況を、人口動態と言語分布といった現状や、言語とりわけ標準語に対する話者の意識、またこの地域の言語の歴史の変遷、近代標準語時代より前の言語文化といった諸観点から分析し、今日に至った過程を明らかにすることを目的とした。同時に、この地域の言語を研究するさいには、これと隣接し言語的に共通するクロアチア、セルビア、モンテネグロも視野に入れることが不可欠であるため、これらの地域における言語文化の諸相を明らかにすることも目的とした。また研究を進める中で、この地域における近代成文法の成立と法の言語の問題も重要であるとの認識に至り、これについても考察することを課題とした。

3. 研究の方法

研究方法は以下のとおりである。

(1) 2013年に実施され2016年秋に公開された国勢調査資料ならびにこれに関係する諸資料、および過去の統計資料等による人口動態の分析。統計資料は主に以下の連邦統計局サイトより入手した：<http://fzs.ba/> (2018年3月時点)

(2) 現地メディア報道、現地研究者へのインタビュー、また関連国際学会での意見交換で入手した情報をもとにした現状分析。

(3) 過去の文法記述および文献資料、また現代語コーパス、主に SketchEngine 内の HrWac, SrWac を用いた語法の分析。SketchEngine のサイトは <https://www.sketchengine.eu/> (2018年3月時点)

(4) 古写本の分析に基づく中世南スラヴ地域の言語文化の再構成。

(5) アーカイブ調査によるバルカン南スラヴ地域の成文法形成と法言語の関係の分析。

なお当初は、現地での言語意識に関するアンケートなどの実地調査を計画していたが、諸般の事情でこれを実施することができなかった。そのため上記(1)にあるとおり、現地研究者へのインタビューや現地メディアの分析、関連テーマの国際学会での意見交換を資料とした。

4. 研究成果

(1) 人口動態全般

ボスニア・ヘルツェゴヴィナは1995年の Dayton 合意以後現在まで、ボシニャク人(ユーゴスラヴィア時代の「ムスリマン」を継承し、連邦ならびにイスラーム共同体への帰属意識を核として形成される民族)とクロアチア系住民を主体とするボスニア連邦(Federation of Bosnia and Hercegovina 以下「連邦」と、セルビア系住民を主体とするスルプスカ共和国(Republic of Srpska 以下「共和国」)に分離されたままである。2013年にユーゴ連邦解体以後最初の全国国勢調査が行われ2016年に公開された。これをまとめると、1991年から2013年の調査の間に、ボスニア全体で人口の約2割にあたる80万人ほどが減少した。これは、ボスニア戦争とその後の国外への人口流出が大きな要因と考えられる。

ボスニアの主要三民族の構成は、ボシニャク人が全体の約50%、クロアチア人が15.50%、セルビア人が約30%である。1981年の統計資料では、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国内の人口比率はムスリマン39.5%、セルビア人32%、クロアチア人18.4%、ユーゴスラヴィア人7.9%

であった。かつてのムスリマンをボシニャクと読み変えると、ボスニア全体ではボシニャク人の割合が増え、クロアチア人の割合が減少したことになる。共和国ではセルビア人が圧倒的多数の約 80% を占めている。全体の傾向として、セルビア人は共和国に集住し、ボシニャク人は連邦に集まり、連邦と共和国での、ボシニャク人とセルビア人の住み分けが一層進行した状況となっている。ボスニア内クロアチア人については、2000 年以後、クロアチアへの移動が加速され、ボスニア内クロアチア人の人口が減少した。

(2) 民族的帰属と言語意識

上記のような領土的分割と、主要三民族の名称を冠したセルビア語、クロアチア語、ボスニア語という名称上の区別慣行が、話者の言語意識にも反映されていることがわかった。ボスニア全体では、セルビア人と自己認識する人の 99% が「セルビア語」を母語と認識するに至っている。ただし連邦内ではこの割合は下がり、セルビア人と称しセルビア語を母語とする人の割合は 80% ほどである。クロアチア人の場合は、連邦内では 96% が母語をクロアチア語としているが、共和国内では 32% がクロアチア語以外を母語と回答している。ボスニア全体では、ボスニア語話者の数がボシニャク・アイデンティティを表明する数を上回っている。これは、クロアチア人やセルビ人で連邦内に居住する人々が、民族帰属とは別にボスニア語を母語と認定していることを示している。ここから、連邦では、自国の言語をボスニア語と称する文化がかなり根付き、その結果、民族的帰属とは関係なく、この地で公用語とされている言語を母語と認知する住民が増えていると結論づけることができる。

(3) 標準語意識と標準語イデオロギー

本研究では、ボスニアおよびその隣接地域での標準語に対する態度に着目した。セルビア・クロアチア語圏では、ユーゴ解体後独立国となった国々が別名称の言語、すなわちセルビアではセルビア語、クロアチアではクロアチア語、ボスニア連邦ではボスニア語、モンテネグロではモンテネグロ語といったように、それぞれの言語を命名するようになり、各地で標準語文法や辞書が刊行されてきた。しかし言語学的には、セルビア、クロアチア、ボスニア、モンテネグロの大部分で使用されているのは、南スラヴ語の中の同一の方言で、この方言をもとに作られた標準語文化を共有してきた。したがってこれらの言語の間の実質的な違いは正書法上のごく一部と、標準語として扱われる語彙の差にあるのみで、人々の標準語についての意識を形成しているのはむしろ、言語イデオロギーであるといえる。本研究では、標準語イデオロギーを、言語についての規範主義的言説ととらえ、このような言説がどう顕在化し、何に由来するのかを考察した。具体的に事例としたのは、セルビア・クロアチア式の標準語で認められている一つの疑問文形式である。近年のクロアチア語圏では、この形式がセルビア語法であるため使用すべきではないという言説が出ている。これについて、17 世紀からの文献や現代語のコーパスデータを分析し、こうした言説が言語事実として根拠あるものではないこと、この言説の発生が第 2 次世界大戦時の独立クロアチア国時代に現れたものであること、これが近年の規範主義的言説の中で復活したことを示した。

(4) 歴史的言語空間としての南スラヴ地域とボスニア

ボスニアは歴史的言語空間としても重要な地域である。本研究ではこの点についても考察した。オスマントルコ以前のボスニアには中世キリスト教文化があり、宗教文献のみならず、聖書外典や偽典、そのほかの説話的物語が伝わっていた。オスマン支配時代にも、内陸部やヘルツェグナ南部などでは正教会、カトリック教会の修道院が活動しており、ここでオスマン時代以前の南スラヴ文献の伝統が継承されたと考えられる。これらの修道院で作成、保存された文献類はわずかではあるが、南スラヴ語西部域の言語変化を知る上で貴重な文献であるのみならず、南スラヴ地域の近代前の言語文化史を知る上でも重要であることが明らかになった。バルカン南スラヴ地域は、東半分が東方正教会、西側が西方教会の勢力下にあり、その中央ちょうどボスニアのあたりで東西教会が接する形になっている。この一帯では、宗教説話などのテキストが東西教会文化圏に共有されており、写本を比較研究するとあきらかに、東方教会圏から西方教会側に伝わったと考えられるものが存在する。セルビア・ベオグラード国立図書館所蔵写本 Rs53 は 15～16 世紀のボスニアで作られらと考えられるキリル文字写本で、文字の拙さなどからこれまで重要性が認知されていないものであった。しかしここには、上記のような意味できわめて興味深い特徴を残したテキストが含まれている。こうした写本を中心に中世におけるボスニアおよび隣接地域の言語文化の関係の研究は本課題研究の後半の柱となった。

(6) 成文法と法言語

本研究ではまた、19 世紀末にモンテネグロの民法典を執筆した V.ボギシッチの法と言語に対する思想と彼の作成した法典の言語について研究した。ボギシッチは法社会学の開祖ともいわれ、バルカン南スラヴ各地に残る慣習法や法的慣習の収集、調査、また法的慣習を表す言語などを調査していた。彼の法典は、法の言語に民衆の言葉を用いるという信念のもと書かれたもので、ボスニア・ヘルツェゴヴィナとくにヘルツェゴヴィナの方言は彼の法典執筆において重要な要素であった。

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計 12 件)

三谷恵子、「ヴァルタザル・ボギシッチと法・慣習・言語 - 」『東京大学草創期とその周辺』報告集、全 1 巻、2019 年、206-218 頁。査読無。

三谷恵子、「使徒ペテロとアンデレの異教徒の町への伝道物語」『SLAVISTIKA』XXXIII/XXXIV、2019 年、125-144 頁。査読無。

Кэйко Митани. Текстологический и лингвистический анализ списков Деяний апостолов Петра и Андрея в стране варваров// Труды Института русского языка им. В. В. Виноградова. Выпуск 6. Лингвистическое источниковедение и история русского языка. (2016-2017). 2018. С.158-171. [http://www.ruslang.ru/rli-archive] 査読有。

Keiko Mitani. The Dream of King Jehoash: A Textual Analysis. *Scrinium*, 2018, No.14, pp.298-317. [https://brill.com/view/journals/scr/14/1/article-p298_20.xml] 査読有。

Keiko Mitani. The Croatian Tradition of *the Story of Akir the Wise* in South Slavonic Recensions. *SLOVO*, 2017, sv. 67, pp.1-21. UDK 821.163-3“13/16“:09 75. 査読有。

三谷恵子、「『十二の金曜日の物語』スラヴリセンシオン写本の比較研究」『ロシア語ロシア文学研究』68号、2016年、1-23頁 [http://yaar.jp.org/robun/RLL_No48] 査読有。

Keiko Mitani. Uz-prefixation and dependnet future in Croatian. *Rasprave*, 2017, 43/2, pp.379-397. UDK 811.163.42'36676. 査読有。

Keiko Mitani. “Начело премудрости...” i južnoslavenski prijevise priče «Slovo Akira premudroga» // Балканский тезаурус: НАЧАЛО. Балканские чтения 13. Москва, РАН. 2015. С.62-66. 査読無。

[学会発表](計 19 件)

Keiko Mitani. Legal Language Questions in the History of Serbian, Croatian, and Montenegrin: The Nineteenth-century Situation viewed from the Perspective of Forensic Linguistics. 2018.12.14. Sapporo. International Symposium “Languages rising above Empires, Blocks and Unions, 1918-2018.” 国際シンポジウム「帝国・ブロック・連邦にそびえる諸言語」、北海道大学スラブユーラシア研究センター、2018年12月14日。

Keiko Mitani. Dvanaest snova Šahinšahi—Rani ruski prijevise u poredbi sa južnoslavenskom tradicijom—. XVI. Međunarodni kongres slavista. Beograd. 20-27.kolovoza 2018 (国際スラヴィスト会議、ベオグラード大学、2018年8月21日)。

三谷恵子「V.ボギシッチの事績に見るバルカン研究の可能性」『バルカン地域研究の新展開—民族文化の越境・接触・変化をめぐる多角的研究をめざして』地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ基調講演、東京大学本郷キャンパス、2018年2月3日。

Keiko Mitani. Evolutive Change and Adaptive Change in Croatian — What Andersen’s “abductive and deductive” model tells us about Language Change. The 23rd International Conference on Historical Linguistics. July 31-Aug. 4, 2017. San Antonio, Texas. Skype participation (第23回国際歴史言語学会、テキサス・サンアントニオ、2017年8月2日)。

Keiko Mitani. Inscription on Solomon’s Chalice in Chapter XIII of *Vita Constantini*: An Old Question Revisited. SBL/EABS 2017 International Meeting. Society of Biblical Literature/ European Association for Biblical Studies, Humboldt University, Berlin (聖書文学会/ヨーロッパ聖書研究学会、フンボルト大学、2017年8月10日)。

Keiko Mitani. Slavic Versions of the Skanderbeg Story: Textual Relationship and Narrator Attitude. Балканский тезаурус: взгляд на Балканы извне и изнутри. Балканские чтения 14. Тезисы и материалы. Москва. 19 апреля 2017 года (バルカン・シソーラス研究会、モスクワ、ロシア科学アカデミー・スラヴ学研究所、2017年、4月19日)。

Keiko Mitani. The Dream of King Jehoash: Textual structure and Intertextuality. The Annual Meeting of the European Association for Biblical Studies. Leuven, Leuven Catholic University. 19. July, 2016 (ヨーロッパ聖書研究学会、ルーヴァン・カトリック大学、2016年7月19日)。

Keiko Mitani. DALIKANJE: Da li je to loše? (Is that bad?). Realia of Language Use and Standard Language Ideology in Croatia. International Symposium “Standard Language Ideology in Slavic Lands” Slavic Eurasian Research Centre. Hokkaido Univ. August 6. 2016. Sapporo (国際シンポジウム「スラヴ諸国における標準語イデオロギー」、北海道大学スラブユーラシア研究センター、2016年8月6日)。

“The Story about the Twelve Fridays”: A Text-critical Study of South Slavic and Russian manuscripts. The 20th Conference on Balkan and South Slavic Linguistics, Literature and Folklore. Utah University, 29.04.2016 (第20回バルカン南スラヴ言語・文学・フォークロア学会、ユタ大学、2016年4月29日)。

Uz-prefixation and the Second Future in Croatian. The Aspectual Semantic Zone: Typology of Systems And Scripts Of Diachronic Progresses. The fifth Conference of the International Commission on Aspectology of the International Committee of Slavists. Kyoto Sangyo University, November 13-15, 2015 (国際スラヴィスト会議アスペクト部門委員会大会、京都産業大学、2015年11月14日).

〔図書〕(計 0 件)

〔その他〕(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。